

集中豪雨による保育所の被災と早期再開に向けた取り組み

徳島大学環境防災研究センター	正会員	○中野	晋
徳島大学環境防災研究センター	正会員	鳥庭	康代
徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部	正会員	武藤	裕則
神戸市立工業高等専門学校	正会員	宇野	宏司
徳島大学環境防災研究センター	正会員	金井	純子

1. はじめに

養護と教育を一体的に実現することを責務とする保育所では家庭や学校以上に安全管理の高度化が求められているが、近年、頻発する集中豪雨への対応力向上も、喫緊の課題となっている。2011 年紀伊半島豪雨と 2013 年山口・島根豪雨、同京都・滋賀豪雨における保育所の被災状況と保育再開までの取り組みに関してインタビュー調査を実施した。

2. 2011 年紀伊半島豪雨

四国から中国地方を縦断した台風 1112 号の影響で、2011 年 9 月 2 日（金）から 4 日（日）にかけ、紀伊半島では記録的な豪雨となり、和歌山、三重、奈良の広い範囲で土砂災害や浸水被害が生じた。2013 年 7 月 4 日に被害の大きかった那智勝浦町立井関保育所、同 8 月 8 日に那智勝浦町福祉課児童係と新宮市子育て推進課にてインタビュー調査を行った。

井関保育所（図 1、平屋建）は 1.65m まで浸水し、壊滅的な被害を受けた。翌日より被災しなかった町立認定こども園で希望者を対象に保育を再開した。園児の安否確認、子どもの健康の維持、応急的なこころのケアのため、直後に家庭訪問を行っている。同所が乳児保育を行っているため、乳児の環境に適した迅速な保育再開の必要性があったことと山間部の小規模保育所であったことで、発達段階に応じた環境が整っている認定こども園での合同保育を実施することになった。保護者の希望もあり、ボランティアの支援を得て園舎の応急的な清掃を行い、半年後の 2012 年 3 月には園舎を利用して卒園式を実施している。その後、園舎は改築され、2013 年 3 月より、通常保育が再開されている。



図 1 井関保育所（那智勝浦町）の浸水状況



図 2 小川分園付近の田万川氾濫状況

3. 2013 年山口・島根豪雨

2013 年 7 月 28 日（日）に山口県と島根県の県境付近を中心に 24 時間 300mm（萩市須佐、301mm）を超える集中豪雨があり、萩市や山口市などで浸水被害が発生した。2013 年 12 月 16・17 日に萩市子育て支援課、萩市立須佐保育園、同田万川保育園、同田万川保育園小川分園を対象にインタビュー調査を行った。

須佐保育園は氾濫した須佐川沿いに位置し、園舎は約 1.2m 床上浸水した。翌 29 日に園長が被害状況の確認

キーワード 集中豪雨、保育所、浸水被害、事業再開、メンタルケア

連絡先 〒770-8506 徳島市南常三島町 2-1 徳島大学環境防災研究センター 中野 晋 TEL088-656-8965

を行ったが、山口県内の周辺道路が寸断されたため、島根県益田市を迂回して約 3 時間かけて登園した。被害確認の他、携帯電話を用いた各家庭へ安否確認が行われた。30 日は子育て支援課と連携し、避難所である須佐中学校の一室で応急保育（希望者、給食なし）を再開している。さらに 8 月 6 日からは被害のなかった田万川保育園の園舎の一部を借りて保育（給食あり）を始めている。一方、田万川保育園小川分園は氾濫した田万川沿いに立地し、1m 程度床上浸水した（図 2）。園児数が少なく、普段より田万川保育園（本園）との交流があったことから、本園にて 8 月 6 日より合同保育が実施されている。調査時点（12 月 17 日現在）では、2014 年度からの再開に向けて、分園舎の修復工事が行われていたが、分園長は保育再開にあたって、避難判断をどのようにしたら良いか不安に感じていた。分園の近くで水位は観測されていないため、避難判断の参考にできる適切な水位情報が入手できないのが問題となっている。

4. 2013 年京都・滋賀豪雨

2013 年 9 月 15 日（日）から 16 日（祝）にかけて台風 18 号の接近に伴い、由良川の中下流で氾濫被害が生じ、川沿いに立地する福知山市立げん鬼保育園と私立わかば保育園が床上浸水被害を受けた。2014 年 2 月 19 日にインタビュー調査を行い、被害状況と保育再開までの取組について聞き取った。

げん鬼保育園は床上 20～25cm の浸水があったが、泥の堆積がなかったことが幸いして、17～18 日の 2 日間で清掃、消毒を実施し、19 日から保育を再開している。清掃や片づけには園職員、市職員に加えて、公立保育園職員、保護者に加えて、近隣の大江高校生徒や看護学校職員などがボランティアで参加している。

わかば保育園には図 3 に示す工事中の堤防の未完成部分の流入や横を流れる用水路からの溢水等により、床上 1.2m まで泥水が押し寄せ、厚く泥が堆積するような被害があった（写真 1）。全面的な修復工事が必要で、この園での早期再開はできないため、17 日に急遽、福知山市と協議して、休園中の幼稚園を借用することとなり、19 日に自由登園の形ではあるが、保育を再開させることができた。休園中の幼稚園を利用するため、厨房が使えなかったが、取引先の給食センターの協力でアレルギー食にも対応した給食を提供している。保育園の修復工事が終わった 2014 年 1 月から、ようやく元の園で再開を果たした。

なお、本園に隣接して同じ社会福祉法人が経営する高齢者グループホームがある。両施設とも由良川沿いで低地に位置していたことから、この法人では近隣の河川水位（戸田水位観測所、図 3 の戸田橋の上流に設置）をチェックして、水防団待機水位を基準に避難を行うように決めていたようである。

5. おわりに

今回の豪雨被害では幸いにも休日や夜間であったため、園児の避難対応の必要性はなかった。しかし、小中学校に比べて保育所では平日はもとより土曜も保育しているケースがほとんどで、多少の大雨警報などでは休みにならないため、幼少中高などの教育機関に比べて子どもが滞在する時間が長い。従って、教育機関以上に安全管理の徹底が必要である。水防法の改正に伴い、浸水区域に立地する保育所では避難確保計画の策定が必要となっている。さらに、豪雨だけでなく、地震などの自然災害の危険性が高まっており、避難対策に加えて、応急保育から通常保育に至るまでの保育再開計画についても事前に検討し、決めておくことがより重要となっている。



写真 1 浸水直後のわかば保育園

(社会福祉法人・みつみ福祉会提供)

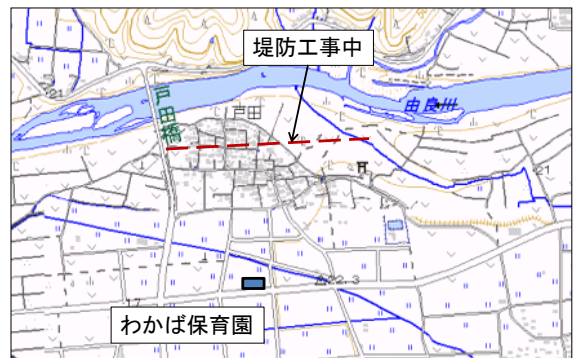


図 3 わかば保育園の位置図